２０１９年度

北九州市立大学 FD 活動報告書

FD 活動の報告と授業設計のアイデア

◇ アクティブ・ラーニングが抱える課題とは？

◇ 授業で Moodle をどう活用すればいいのか？

◇ なぜ授業で Moodle を活用するのか？

◇ 学生のやる気を引き出すコツはなにか？

◇ 事前・事後学習を促す工夫にはどんなものが？

☞　本書を読めばそのヒントが見つかります！

北九州市立大学 FD 委員会

2019年度FD活動報告書

目次

1. はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2. FD研修報告
（1）春季新任教員研修　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（2）夏季新任教員研修　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
（3）学生の主体性を促す授業の工夫　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
（4）体験を通した学び～アクティブラーニングの是と非～　・・・・・・・・・ 24
（5）初年次教育を考える
～基盤教育科目のアカデミック・スキルズⅠを例に～　・・・・・・・・・ 26

3. 授業のピアレビュー報告
（1）授業のピアレビュー概要とコメント　・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
（2）2019年度ピアレビュー実施状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
（3）各部局の取組状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

4. Moodleの授業活用事例
―5名の先生へのインタビュー―　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

5. FD委員会について
（1）活動概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
（2）活動一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
（3）委員構成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
（4）委員会議事録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

6. おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73

※Webページ掲載にあたって原本から一部削除した頁があります

第１章

はじめに

はじめに

副学長（教育・FD 担当）
FD 委員会委員長　　柳井　雅人

「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（平成 30 年）において、教学マネジメントに係る指針に盛り込むべき事項として、FD（ファカルティ・デベロップメント）の高度化、SD（スタッフ・ディベロップメント）の高度化が取り上げられた。「教学マネジメントは大学が自らの責任のもと、各大学の事情に合致した形で構築すべきもの」と述べ、「各大学が創意工夫を行い学士課程の質的転換に向けた取組を確立することが重要である」ということも指摘している。もちろん本学においても学部や組織の創意工夫を重視した「ボトムアップ型」という特色ある FD 活動を推進し、認証評価や法人評価で高い評価を受けてきたところである。

FD（授業改善）活動は、教育の質的改善と質の高い人材育成を行うための重要なツールであり、その手法について可視化するとともに、FD の成果を教職員全体で共有しながら、実践的に活用していくものにしていく必要がある。つまりこの活動自体が内部質保証を高度に保つための重要な作業となっているのである。

こうした考えのもと、本年度は毎年開催されている春季・夏季新任研修、必修研修である「大学教育再生加速プログラム事業 FD 研修～学生の授業外学習時間を促す授業の工夫～」、福岡女子大学の和栗百恵准教授をお招きした「体験を通した学び～アクティブラーニングの是と非～」（地域創生学群主催研修）、「初年次教育を考える～基盤教育科目のアカデミック・スキルズを例に」（基盤教育センター主催）など多彩な研修を実施してきた。こうした研修とは別に、各学期ごとのピアレビュー、授業評価アンケートの実施（今年度より電子化された）、大学教育学会への参加など、活発に FD 活動に取組んでいる。

しかし、本学における FD 活動は曲がり角に来ていることも事実である。教職員は内発的に FD 活動の必要性を感じて、主体的・自律的に取り組み、参画すべきであるという考え方が、十分浸透しているとは言い難い現状となっている。必修研修については DVD 視聴を含めて 90％以上の参加率を達成しているが、Moodle 研修やアクティブ・ラーニングなどの研修になると参加率はまだ十分とは言えないものとなっている。この種の研修や自主活動は一部教員にとってのスキルと思われている節があり、参加率が低調となっている。こうした実情を検証、検討し、改善すべき時期に差し掛かっていると言える。現在の中期計画においても、アクティブ・ラーニングの実施および充実が謳われており、ハードの環境が整いつつある中で、計画達成を図っていく必要がある。

2019 年度より新しい３つのポリシーに基づく新カリキュラムもスタートした。また、IR 室の設置やアセスメントポリシーの整備などが進展しつつあり、これを土台として教育現場の質的改善と向上をめざすサイクルが出来上がってくる。教育の質的改善を図るために、教職員の認識が一致するよう、FD 活動を一層深めていく必要があろう。本学では他大学と異なり、教職員の創発から FD 活動を深めていく体制をとっており、ボトムアップからの現場感覚に基づいた実践的活動を主体としている。今後もこの取組みを一層深めていきたい。

最後に、熱心な FD 活動へのご協力を賜っていることについて、中溝幸夫先生をはじめ関係者の方々に対して、この場を借りて、厚く御礼申し上げる。

第２章

FD 研修報告

(1) 春季新任教員研修

■ 日　時：2019 年 4 月 2 日（水） 9:00 ～17:00

■ 場　所：北方キャンパス　本館 E-5 12 会議室

■ 研修のプログラムと担当者：

	プログラム内容	担当
1	北九州市立大学における FD 活動への取組と展望	柳井雅人 FD 委員長
2	今、大学教員に何が求められているか？	中溝幸夫 FD アドバイザー
3	模擬授業観察とピアレビューメモ	田代洋久教授（法学部）
4	グループ討論の説明	中溝幸夫 FD アドバイザー
5	グループ討論と発表 ・テーマ「学生の学びを促すための工夫」について ・グループ討論（60 分）、発表と質疑応答（60 分）	コーディネーター 中溝幸夫 FD アドバイザー
6	新任教員と既在籍教員の自己紹介および懇談	
7	１学期の授業計画案の説明、研修アンケート	中溝幸夫 FD アドバイザー

■ 参加者数： 新任教員 10 名、他 11 名（既在籍教員）

■ 研修の概要

研修内容は、ほぼ例年どおりであった。 (1)は「北九州市立大学における FD 活動への取組と展望」と題した FD 委員長による研修導入のための基調講演。(2)は FD アドバイザーによる『今、大学教員に何が求められているか？』と題して「FD とは何か」「なぜ必要か」といった FD 関連の基礎知識および「北九大の FD 活動の特徴」や「教員の教育力向上のための授業方法」などについての講義。(3)は田代洋久教授（法学部）による模擬授業の一部と先生ご自身が授業で工夫しているポイントなどの解説と質疑応答。(5)は「学生の学びを促すための工夫」をテーマにしたアクティブ・ラーニング形式でのグループ討論。（この討論には 11 名の既在籍教員の参加があった。）（6）では、新任教員 10 名と既在籍教員 10 名による自己紹介と懇談を行った。(7)の授業計画（案）については、資料にもとづいて説明し、4 月末までに１学期に行う科目の授業計画（１コマ分）を提出すること、夏季研修ではこの授業計画に基づいて、１学期「授業の振り返り」を行うことが新任教員に伝えられた。午前 9:00 に開始し、午後 5:00 に終了した。

■ 全体的コメントとアンケートの結果

本研修の目的は、①新任教員に本学の FD 組織や FD 活動の内容を理解してもらうこと、②授業の質向上をテーマにして既在籍教員とのグループ討論と発表、および質疑応答を介して、大学教員として授業の質向上に関心を深めてもらうことであった。研修後のアンケート結果に基づくと、目的はほぼ達成されたと考えられる。FD 研修自体は、新任教員におおむね好評だった。

FD 研修の改善点としては、「模擬授業のやり方と後半のグループ討論の内容をもっと関係づけたほうが

よい」や「研修時間が長くて、体力的に辛かった」などがあった。

既在籍教員の参加者数は、例年よりも多く合計 11 名で、グループ討論も非常に活発であった。新任教員と既在籍教員との間で、教育や授業についての知識や経験がある程度、共有できたという点で、新任教員には大いに好評であった。

(2) 夏季新任教員研修

■　日　時：2019年8月27日(火)　10:00～16:30

■　場　所：北方キャンパス　本館E-512会議室

■　研修テーマ：『１学期授業の振り返りと授業工夫の共有化』

■　研修目的：1学期に新任教員が行った授業について、＜授業設計＞＜授業工夫のポイント＞＜授業実践結果＞＜改善計画＞などを報告し、その内容について質疑応答することによって授業工夫へのモチベーションを高め、また授業工夫についての情報を共有化すること。またグループ討論によって、さまざまな工夫や問題を共有し合うこと。

■　研修のプログラムと担当者：

	プログラム内容	担当
1	１学期授業の振り返りについて、 新任教員の個人発表（一人15分×9名）	コーディネーター 中溝幸夫FDアドバイザー
2	小グループ討論　(A, B , Cグループ各4名、80分) ・テーマ『学生の主体的授業参加と主体的学びを促す授業方法についてどう工夫するか？』	
3	全体討論（80分） ・小グループ内での討論のまとめの発表と質疑	

■　参加者：新任教員10名、他5名（既在籍教員、FD委員長、FD副委員長、アドバイザーを含む）

■　内容の要約

本研修の主目標は、新任教員の『授業の振り返りと情報共有』であった。午前中の部では、新任教員は４月に計画した授業を１学期の授業として実践して、どんな結果が得られたかを報告し、その内容について、全員で質疑応答を行った。午後の部では、３つのグループに分かれて『学生の主体的授業参加と主体的学びを促す授業方法についてどう工夫するか？』というテーマについてグループ討論を行った（約１時間 20 分)。キーワードは、＜学生の主体性＞＜授業方法＞＜学習評価＞＜アクティブラーニング＞であった。各グループ内で討論した後、その内容をグループごとに発表し、全員で質疑応答した。

■　研修結果とコメント

研修アンケート回答者11名（参加者15名）のうち、全体的印象として「非常によかった」(6名)「まあよかった」(3 名)、「どちらとも言えない」(１名)、「あまりよくなかった」(1 名）であった。回答者の約８割は「よかった」という反応であった。反応の中で多かった「よかったこと」理由は、『他学部の先生方の授業工夫が聴けたこと。』『先生方の悩みを共有できたこと。』などがあった。また、小グループ討論や全体討論において言及のあった、本学学生特有の『自己肯定感の低さ。』に対するコメントも複数あった。

研修のよかった点、研修から学んだ点についてのコメントなどから、本研修の目的である『授業の振り返りと授業工夫の共有化』は、ある程度達成できたと言えるだろう。

夏季研修の改善意見としては、『研修前までに、１学期の授業評価アンケートの結果がわかっているとよい。』『ランチミーティングの実施等があれば、フランクに話せる。』『グループワークのテーマを考え

直す必要がある。』『朝から夕方まで拘束されるのはしんどいので、２～３日に分けて実施してほしい。』等があった。

(3) 学生の授業外学修を促す授業の工夫

■ 日　　時：2019年10月30日（水）14：00～16：00

■ 場　　所：北方キャンパス　本館C-303教室　/　ひびきのキャンパス　第一会議室

※北方キャンパスでの研修をひびきのキャンパスにネット同時配信

■ 主　　催：AP推進室共催

■ プログラム

1	北九大のAP事業の取組・進捗状況	木下　祥一（AP推進室　特任教員　講師）
2	北九大における学修行動調査の分析結果 （授業満足度・授業外学修時間）	佐藤　敬（情報総合センター長　教授）
3	質疑応答	1・2の内容について
4	外部講師による講演 「学生の授業外学修を促す授業の工夫」	沖　裕貴（立命館大学　教育開発推進機構　教授）
5	質疑応答	4の内容について

■ 参加者数：158名

（内訳）

学科	出席者	ＤＶＤ視聴
外国語学部	21名	6名
経済学部	25名	1名
文学部	25名	5名
法学部	15名	11名
地域戦略研究所	4名	3名
国際教育交流センター	2名	1名
地域共生教育センター	0名	1名
情報総合センター	1名	0名
マネジメント研究科	7名	1名
基盤教育センター（北方）	26名	0名
基盤教育センター（ひびきの）	5名	4名
エネルギー循環化学科	3名	12名
機械システム工学科	7名	5名
情報システム工学科	5名	11名
建築デザイン学科	6名	4名
環境生命工学科	3名	9名

環境技術研究所	1名	3名
その他（学長、特任教員）	2名	0名

■　研修の概要

2019年度 必修ＦＤ研修として「学生の授業外学修を促す授業の工夫」をＦＤ委員会とＡＰ推進室の共同で開催した。研修の内容として、大学教育再生加速プログラム（ＡＰ）事業の取組・進捗状況の報告、本学学生の学修行動調査の分析結果の報告、外部講師による講演を通じて、本学教員に“学生の授業外学修を促す授業の工夫”に取り組んでいただくことを目指した。実施概要は以下のとおりである。

日時：令和元(2019)年10月30日（水）14：00～16：00
会場：北方キャンパス　C-303教室
　　ひびきのキャンパス　第一会議室　※ひびきのキャンパスへネット同時配信
対象者：全教員（必修研修）　希望する職員も参加可
参加者：236人（北方156人、ひびきの78人）※出席＋DVD視聴
参加率：92.5%（北方92.9%、ひびきの91.8%）
※欠席者への後日フォロー実施を含み、サバティカル休暇などを除く
内容：・北九州市立大学におけるＡＰ事業の取組・進捗状況
　　・学修行動調査の分析結果
　　・立命館大学 教授 沖裕貴氏によるご講演
　　講演テーマ：「学生の授業外学修を促す授業の工夫」

■　実施結果

研修を開催したことで、学修行動調査の報告と分析結果および本学の第３期中期計画における学修時間に関する目標が再確認されるとともに、授業外学修時間が減少傾向にあることが課題として確認された。また、併せて行われた学内のシラバス分析の結果と学生の授業外学修を促すための視点として「授業時間外学修の成果を評価に反映させる」、「何かを提出させる、何かを行うなど、各回で具体的な指示を与える」ことが提案された。立命館大学の沖裕貴先生に外部講師として「学生の授業外学修を促す授業の工夫」について、学習指導要領の変遷や大学入試改革などの背景を基に、目標設定、評価方法、授業設計、教員の授業中の指示などについて講演いただき、今後、学生の授業外学修を促す授業を設計する上での知見をいただいた。本学教員から質疑が活発になされ、今後の教育改革に向けた意見交換を行った。本研修は、北方キャンパスで行われた研修をひびきのキャンパスにネット同時配信を行った。

(4) 体験を通した学び～アクティブラーニングの是と非～

■ 日　　時：2019年11月27日（水）13：00～14：30
■ 場　　所：北方キャンパス　1号館1-204教室
■ 主　　催：地域創生学群

■ プログラム

1	講習会	和栗　百恵（福岡女子大学国際文理学部　准教授）
2	質疑応答	1の内容について

■ 参加者数：21名

(内訳)

経済学部経済学科	1名
文学部人間関係学科	1名
地域戦略研究所	4名
基盤教育センター	12名
非常勤講師	1名
AP推進室	1名
FDアドバイザー	1名

■ 研修の概要

本研修は、地域創生学群のＦＤ委員が主催して開催された。

アクティブラーニングとは、いったい何なのか？から問われた本研修ですが、アクティブラーニングの単なる説明に終始することなく、それを日頃の我々が取り組んでいる教育活動においてアクティブラーニングという視点で見返していると、どのような評価になるのか、という点において、互いに語り合いながら検証していくというものであった。

つまり、日常的な教育活動から生じる各教員の課題や悩み、葛藤等を付箋紙や模造紙を用いながら、共有することから始まった。各4人組のテーブルを5つ準備され、自分自身の取り組みの振り返りを中心に据えつつ、講師の和栗先生のファシリテートのもと、各教員が現在取り組んでいる教育事業とアクティブラーニングとを紐づけする作業を共に取り組んだ。

■ 全体的コメントと反省

日ごろ、なかなか語り合うことが無かった教育に関する自身の考え方や想いを他の教員同士で語りあう事自体に大きな効果があった。参加者からは、共通の悩みや課題を持っている者もおり、その課題を克服するための独自の工夫についても、和栗先生のファシリテートのもと、明確化することができたと言える。

日常的な「おしゃべりの時間」こそ、最大のＦＤであるという和栗先生のご指摘通りであると参加者の多くが感じていた。その効果もあり、2020年度の地域創生学群の主催するＦＤ研修は、まず教員同士での「語り場」としての機会を作ろうという事になり、担当ＦＤ委員が企画を練っている所である。これまでの各教員が独自に授業や教育活動を好き勝手に実施していくことは許されず、全学的に「教育の質保証」に取り組まなければならない。そのような社会的潮流の中、各組織が体系だった教育事業を展開していくためにも、各教員の考え方や取り組み、そして課題をも共有していく中で、より質の高い教育を組織として学生に提供することができると考える。

(5) 初年次教育を考える～基盤教育科目のアカデミック・スキルズⅠを例に

■ 日　　時：2020年1月29日（水）14：00～15：00

■ 場　　所：北方キャンパス　本館D-202教室

■ 主　　催：基盤教育センター

■ プログラム

1	講習会	廣渡　栄寿（基盤教育センター　教授）
2	質疑応答	1の内容について
3	講習会	神原　ゆうこ（基盤教育センター　准教授）
4	質疑応答	3の内容について

■ 参加者数：41名（うち職員2名）

（内訳）

外国語学部英米学科	1名
外国語学部中国学科	2名
外国語学部国際関係学科	2名
経済学部経済学科	1名
経済学部経営情報学科	3名
文学部比較文化学科	2名
文学部人間関係学科	2名
法学部法律学科	4名
地域創生学群	4名
地域戦略研究所	1名
基盤教育センター	13名
マネジメント研究科	1名
情報総合センター	2名
ＦＤアドバイザー	1名
学術情報課	1名
学務第一課	1名

■ 研修の概要

2019年度のカリキュラム改正に伴い、基盤教育センターでは、外国語学部・経済学部・文学部・法学部・地域創生学群1年次1学期必修科目である「アカデミック・スキルズⅠ」を新たに開講した。本研修は，北方キャンパス

に所属している教職員に「アカデミック・スキルズⅠ」の狙いや内容，成果などを知っていただき、今後の教育や運営に役立てていただく目的で実施した。

本研修は、第1部と第2部に分けて実施した。「アカデミック・スキルズⅠ」は、複数の教員が担当する科目である。第1部では、まずは基盤教育科目における「アカデミック・スキルズⅠ」の位置づけや全体的な狙い、複数教員の中で統一した教授方法や評価方法などについて、廣渡栄寿教授より報告した。さらに、授業評価アンケートの結果から、その学習成果についての報告も行った。

第2部では、神原ゆうこ准教授より、「アカデミック・スキルズⅠ」の実践事例として、具体的な授業内容や教材などの報告を行った。2019年度では、神原准教授は経済学部のクラスを担当しており、そのクラスで実際に使用した教材やそのときの学生の反応、良かった点や苦労した点などの報告があった。

■　全体的コメントと反省

アンケート結果を見ると、今回の研修が「よかった（大変よかったを含む）」と回答された割合と、今後の教育活動の「参考になった（非常に参考になったを含む）」と回答された割合は、ともに全体の94%であった。この結果から、非常に好評なFD研修であったと考えている。

本研修の目的は、北方キャンパスに所属している教職員に「アカデミック・スキルズⅠ」の狙いや内容、成果などを知っていただき、今後の教育や運営に役立てていただくことである。アンケートのQ3を見ると、「アカデミック・スキルズで実際にどのような授業を行っているのかを見られて理解が深まった。」や「課題の出し方、ワークシートの内容に創意工夫がなされていた点は、専門教育科目ゼミの中でも、教員側が参考にさせていただくことが可能であると考えました。」、「『考える』授業を具体的にどのように進めていくか、とても参考になった。」など、アカデミック・スキルズⅠに対する理解や、今後の教育の参考になったといった意見を多くいただいている。これらの意見から、今回のFD研修の目的を達成することができたと考えている。

今後の課題は、基盤教育と専門教育の連携についてのFD研修を検討することである。今回のFD研修の目的は上述したとおりであるが、「アカデミック・スキルズⅠ」を通して部局を超えた連携の可能性を模索することもその狙いのひとつであった。アンケートのQ4，Q5にも「専門との関連を持つ基盤教育の研修を増すべき。」や「基盤のゼミ内容と、学科基礎ゼミ内容をすり合わせる作業が重要であることが分かり、有意義でした。」。「基盤と、学部・学科との効率的な連携について、考える機会がまたあれば幸いです。」といった意見があるように、各部局の教職員の方々も連携の必要性を感じているようである。FD研修を通じて部局間の連携を深め、より良いカリキュラムを在学生に提供できるように、今後も努力していきたい。

第３章

授業のピアレビュー報告

(1)概要とコメント

以下に示す授業のピアレビュー実施状況と報告は、今年度における各部局各学科ごとに行われたピアレビュー活動の報告である。“授業のピアレビュー”活動は、教員相互の授業公開・参観・授業改善のためのミーティングを含んでいる。この活動は、授業の質向上にとって効果的な方法の一つであり、本学では十数年前から持続的に行われてきた。現在、授業のピアレビューの具体的方法（担当者、回数、やり方など）については、それぞれの部局・学科の方針に基づいて独自に行われている。実施状況の回数を見る限り、学科間で“温度差”がある。

一般的に、同僚の授業を参観したり、同僚に自分の授業を公開することは、授業の振り返り、ひいては授業の質向上に大いに役立つであろう。重要なことは、参観・公開の活動から授業の質向上を目指した教員自身の「学び」である。学生の学びの促進は、まずもって学び続ける教員の“態度”から生まれると言われる。その意味で、授業のピアレビューは、FD 研修と並ぶ効果的な方法の一つであると考えている。

(FD アドバイザー)

(2)実施状況

部局		実施授業回数
外国語学部	英米学科	8
	中国学科	2
	国際関係学科	2
経済学部	経済学科	7
	経営情報学科	
文学部	比較文化学科	4
	人間関係学科	2
法学部	法律学科	2
	政策科学科	2
地域創生学群	地域創生学類	2
国際環境工学部	エネルギー循環化学科	4
	機械システム工学科	5
	情報システム工学科	9
	建築デザイン学科	11
	環境生命工学科	8
基盤教育センター	教養教育部門	3
	語学教育部門	6
	ひびきの分室	5
マネジメント研究科		10
社会システム研究科		1
法学研究科		2
合計		95

(3)各部局の取組状況

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	外国語学部	学科等	英米学科

2．部局の実施方針、方法

６年前から、授業を行う教員と参観する教員とで組を作ってピアレビューを実施する方法を推奨している。多くのピアレビューはこの方法で行われた。この方法により、授業を行う教員が自分の長所と短所を知り、また参観教員が参観した授業の長所を自身の授業に取り込むことが円滑に行われている。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	日英翻訳演習（5月23日）	2	24	11			
2	日英翻訳演習（7月8日）	2	30	12			
3	イギリス劇文化研究	3	153	13			
4	英語研究（音声学・音韻論）	2	76	14			
5	English for Core Program	2	50	15			
6	メディア英語演習	2	40	16			
7	オープンキャンパス模擬授業	2	250	17			
8	社会システム総合概論	1	20	18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

″A good approach was taken in this class.″「これからの大学の授業の一つのモデルとなり得る」をはじめ、新設および旧カリキュラムからの科目双方について高い評価が多かった。コメントからは、教授法、授業内活動、宿題、教材の提示方法、教室の使い方（アクティブラーニング、机間巡視）、雰囲気づくり、英語を使用言語とした授業における配慮、話し方、指示の出し方をはじめ、多方面から各授業が吟味されたことが分かる。″...the combination of lecture, discussionand individual work led to a good pace and variation.″というコメントがあるが、全体として、学習内容の定着を図るために多方面で工夫が講じられていることがうかがえる。同じ科目を担当する複数の教員間で、授業運営に関わる有益な情報が共有された点も有意義であった。

5．成果と課題

今年度は定評のある授業に加えて、オープンキャンパス時の模擬授業や、新カリキュラムに基づく新設科目や新任教員による授業についてもピアレビューが行われた。参観する教員の立場から学ぶところの多い授業が多かったようである。また、教員間の意見交換・情報交換の機会としても有意義であったことがうかがえ、今年度の英米学科のピアレビューは大きな成果をあげたと総括できる。来年度以降も継続していきたい。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	外国語学部	学科等	中国学科

2．部局の実施方針、方法

中国学科ではピアレビューは年1回ペースで実施されている。今年度は2科目のレビューが第2学期に行われた。今年度はレビューを受ける講義内容と教育・研究領域が遠いレビュアーによるレビューが行われ、ユニークな視点からコメントが得られ、ＦＤ活動として貴重な機会であり、また有意義であったといえよう。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	中国語中級総合Ⅱ	1	14	11			
2	中国経済論Ⅱ	1	38	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

「中国語中級総合Ⅱ」については、シラバスの内容に沿ったものであること、講義の進め方についてもその適切性が確認された。また、輪読形式で進められる講義における学生の誤りへの対応、内容の説明・解説については、担当者の単なる語学教授、あるいは語学教授法の視点にとどまらない幅広い教育経験の蓄積に基づいたものであることが見出された。

「中国経済論Ⅱ」についても、シラバス通りの内容であり、スライド、板書、プリント、話し方には、受講生の集中力や興味を途切れさせない工夫や学生が理解しやすい工夫が見られた。また授業の終わりに実施される内容確認のプリントの活用の仕方も参考になった。

5．成果と課題

上述の語学教育についてのコメントは、幅広い視点からの非英語系の語学教育でのスキルの教授にとどまらない幅広い分野での教育経験が生かされることの重要性を示すものである。そしてこれは語学習得だけでなく言語の背景にある文化や歴史への学生の関心を引き出すという意味でもきわめて重要である。この示唆が得られたことは大きな成果である。また課題として語学科目、講義科目を問わず、各担当講義の中でいかにその言語が話される地域への学生の関心を高めるか、同時に対象地域を言語、文化、歴史等の各分野において相対化できる力をどのように養成していくか、が挙げられる。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	外国語学部	学科等	国際関係学科

2．部局の実施方針、方法

本年度は二つの形態でピアレビューを実施することにした。一つは、毎年4-5人の専任教員が交代で担当する二年次学生全員参加のプレゼンテーション大会、もう一つは新任教員の講義に対するピアレビューである。必修科目で行われるプレゼンテーション大会は、実質的に本学科の全教員による相互評価や検証の過程でもある。なお、本年度は新任教員2人が加わったので、そのうち1人の講義に対してかかるピアレビューを実施することになった。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	基礎演習	4	87	11			
2	東アジア経済論	5	49	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

プレゼンテーション大会を素材にしたピアレビューでは、大会の運営や個々のプレゼンの評価とともに、この大会準備に取り組んでいる基礎演習の内容改善に向けた提言が行われた。東アジア経済論では、新任教員の授業をレビューした上で、講義の質や教材、時間配りなど運用の適切さなどについてコメントを行った。

5．成果と課題

新任教員の講義に対するピアレビューの実施は、かかる授業の質的な向上につながるだけでなく、今後学科授業体制全体のバランスを取るうえでも役立った。また、プレゼンテーション大会は毎年の開催であるので、授業内容の改革のためにも、こうした取り組みが大切であると感じる教員が多かった。単にピアレビューを実施する授業の数を増やしても、学科の教育プログラム改善に効果はなく、かえって個々の教員の士気が低下することも予想されるので、学科教員にその意義を納得してもらった上で、多くの者が前向きに取り組むピアレビューを実施することが望まれるであろう。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	経済学部	学科等	経済学科・経営情報学科

2．部局の実施方針、方法

経済学部全講義を対象とする（ただし担当教員の事前の了承を得ることとする）。
その上で、経済学部教員は学期に1回、計年2回ピアレビューを実施することとし、新任教員がいる場合には年2回の内1回は新任教員の担当講義を見学することにより、新任教員研修も兼ねることとする。なお、実施に際して、特に学科の区別はせず、一方の学科教員は他学科の授業を見学することも可能とする。
他大学の授業聴講も可とし、また講義聴講という形でなくとも、たとえばオープンキャンパスの模擬講義・演習の聴講等、幅広く可としている。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	企業データ分析（オープンピアレビュー）	13	40	11			
2	日本経済史Ⅱ（オープンピアレビュー）	12	100	12			
3	入門演習プレゼン大会	12	300	13			
4	ポスターセッション大会	8	－	14			
5	OC模擬講義「経済学入門の入門」	3	－	15			
6	OC模擬講義「経営学・会計学では何を学ぶのか」	4	－	16			
7	その他	11	－	17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

・実際に講義を受ける立場になってみると、「解説→練習」の繰り返しは多ければ多いほど良いと感じた。・仮説に基づく実証実験を、関係各所との調整のうえで行った点が秀逸であり、このような水準の調査活動を学生に行わせるには、どのような指導を行うことが適切であるか、自省的に考えるきっかけを与えてくれた。・授業中に多くを語らず、良い意味で不完全な情報と検討の一部を説明することで、授業中に関心が刺激される。その説明の続きは？なぜそういえるのか？情報は他には？などと自発的な学習への意欲が刺激されるのではないか。

5．成果と課題

聴講した各教員は、学生の興味・関心を引くにはどうしたらよいか、演習でどうしたらよいか等について、新たな知見を得ている。今年度もオープンなピアレビュー日を設定し、多くの教員が参加した。講義の合間に手を動かすことの重要性やスライドと板書の併用の工夫などから、多くの刺激を受けたようである。
さまざまな機会が教員にとっても学びの機会になりえるので、来年度はさらにピアレビューの対象を拡大することも考えられる。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	文学部	学科等	比較文化学科

2．部局の実施方針、方法

比較文化学科では、ほとんど全ての授業で自由にピアレビューが行うことができるような体制をとっているが、とりわけオムニバス講義と特別講義では積極的なピアレビューを呼びかけている。また、今年度は新任教員が２名いたため、そのピアレビューも活動計画に含まれていた。さらに今年度は、特別講義のピアレビューと合わせ、講義終了後に特別講師を囲んで講義についての意見交換を行う「FD懇談会」も開催した。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	文化と表象	1	150	11			
2	比較表象文化	1	160	12			
3	日本文学概論	1	58	13			
4	日仏文化比較	1	30	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

配布資料の使い方や、説明の工夫など、授業の手法についてのコメントが多かったのはもちろんであるが（例えば比較表象文化のピアレビューにおいては、映像資料の適切な使用について評価のコメントがあった一方、日本文学概論のピアレビューにおいては、映像資料やパワーポイントなどビジュアル重視の資料を使用しなくとも、工夫次第では学生の興味を惹く説明ができることを評価するコメントが見受けられた）、より大きなテーマ設定や主題の選択などについてのコメントが多かったことが特徴的である。比較文化学科は、教員の専門領域が多彩である一方、教員間の問題関心は比較的近い場合が多いため、授業の進め方についても、細かいテクニックよりは、より参考にしやすい問題設定の仕方などに関心が集まるものと思われる。

5．成果と課題

ピアレビューに参加した教員は、いずれも自身の授業にフィードバックできるような知見を得たことが各レビューから窺え、その点は評価できる。また今年度初めて実施した「FD懇談会」も、参加者からは非常に好評であった。引き続き実施していきたい。一方で、幾つか実施を予定していたオムニバス科目でのピアレビューが、様々な事情で実施できなかったことは残念であった。とりわけ、今年度はオムニバス科目でのピアレビューが、新任教員のピアレビューも兼ねることになっていたため、結果として１人の新任教員の講義についてはピアレビューを行うことができなかった。来年度の課題としたい。ただし、ピアレビューを行うことができなかった新任教員が、別の授業のピアレビューに参加していたことは、ピアレビューの主旨にはかなっていたと言えよう。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	文学部	学科等	人間関係学科

2．部局の実施方針、方法

本年度、1学期は新しく採用された教員の授業を、2学期は優れた授業実践で評価の高い教員の授業を、それぞれピアレビューの対象科目とした。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	スポーツ心理学	4	90	11			
2	心理学概論	4	119	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

【1学期：スポーツ心理学】資料等が丁寧に作られており、事前の準備に数多くの時間と労力が注がれていることが窺われた。
【2学期：心理学概論】学問の意義について、様々の資料を提示しながら学生自らが考えるように仕向けていくその授業の進め方に感銘を受けた。

5．成果と課題

新任教員にとっては、自らの授業実践を振り返るための貴重な場となっている。
しかしながら、ピアレビューを実施する際には、かなり早い時期から学科教員に実施の告知をしているところであるが、実際に参加する教員数がきわめて少なく、参加する教員が固定化してきている。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	法学部	学科等	法律学科

2．部局の実施方針、方法

法学部は、法律学科と政策科学科の2学科で構成されているが、基本的に、両学科で共通のことをやることが多い。ＦＤのピアレビューに関しても、法学部の伝統に基づき、この原則に則り、各学期で、各学科から1科目を選んで、ピアレビューを実施した。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	日本国憲法原論（1学期）	2	300	11			
2	相続法（2学期）	3	57	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

・双方向授業の実施がみられる。
・レジュメの内容の充実が見られ，微視的にも巨視的にも理解ができる仕掛けになっている。
・最新の論点や実務動向を体験談を含めて説明していることが学生の集中力喚起につながっている。
・合同講義（日本国憲法原論）についてはやや難易度が高いという反応が見られた。

5．成果と課題

今期法律学科では伝統的な授業参観と，複数教員による合同授業によって，ピアレビューを行った。合同講義の形式については試行錯誤の面はあるものの，本学のみならず昨今の大学で求められている科目間連携を各教員が意識するために大いに有用であり，また複数の教員が多様な視点を教員の前で論ずる様子は学生の関心喚起にも資している。学生関心喚起の観点について，相続法の講義を新任教員・FD委員らが参観したのは教材研究上きわめて有用であった。ただし，これらの知見やベストプラクティスが，ピアレビューに参加していない教員との間に共有されづらい状況が現在の課題であると言えるかもしれない。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	法学部	学科等	政策学科

2．部局の実施方針、方法

法学部は、法律学科と政策科学科の2学科で構成されているが、基本的に、両学科で共通のことをやることが多い。ＦＤのピアレビューに関しても、法学部の伝統に基づき、この原則に則り、各学期で、各学科から1科目を選んで、ピアレビューを実施した。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	政党政治論（1学期）	2	60	11			
2	政策科学入門Ⅱ（2学期）	1	100	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

ある一定の学術的内容に対し，複数の視点からの世界を見せるという意味で有意義なものとなった。教員によって意見の食い違いが発生することこそが，「単に教員の話をメモするだけの授業から，自分自身で考える契機となる授業になる」という意味で，極めて（知的に）積極的な参加を求める授業になったと思われる。ただし，今回は論点設定によってはあまり教員間の意見の差がでなかった論点もあり，今後同様の試みを行うに当たっては留意が必要になろうと思われる。

5．成果と課題

昨年同様，単に参加教員が参観するだけではなく，交流授業形式として，教員らが授業そのものに参加する試験的な試みとして合同で展開した。ある教員の担当科目に，別の教員が登壇するという形である。前期は複数教員が合同で，後期は別教員を主たる登壇者として本来科目担当者との質疑応答を行うという形である。授業内容は教員の研究内容にも関与する物となったが，それがかえって学生の関心を引き付けるには効果を発揮したことがコメントカードなどより実証されている。授業への関心惹起というFD活動の一目的からすれば，本方式は有効なように思われ，来年度以降も様々な形式を試行していきたいと考えている。

2019年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	地域創生学群	学科等	地域創生学類

２．部局の実施方針、方法

２０１９年度は、新カリキュラムの初年度である。そのため地域創生学群では、新たに設けられた科目についてピアレビューを行う。
今年度対象とするのは、１学期は「アカデミックスキルズⅠ」（基盤教育科目／必修）、２学期は「地域創生論」とする（なお、両科目とも受講生は地域創生学群１年生である）。前者は大学や地域での学びや実習の基礎となる「考え方・調べ方」を修得することを目指したものであり、後者は本学群での「実習科目」と「演習科目」を関連づける「地域創生科目」として位置づけられたものである。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	アカデミックスキルズⅠ	4	40	11			
2	地域創生論１２（都市社会学）	1	88	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

①「アカデミック・スキルズⅠ」（以下、アカスキⅠ）等、教養教育科目と地域創生学群の実習や専門科目との接続・連携が強く期待される。
②「アカスキⅠ」では、Moodleの活用によって「教員―学生」「学生－学生」の学びの共有が可能であること、そのためにも事前準備とフォローアップが重要であると感じた。
③課題に対して学生が意見交換しながらMoodleに自分の意見を打ち込む等、「アカスキⅠ」での＜自らの意見を言語化して他者に伝えるトレーニング＞は参考になった。効果的なアクティブ・ラーニングであった。
⑤「地域創生論」１２では、講師の専門領域と「地域創生」の形が関連づけられており、示唆に富む内容であった。

５．成果と課題

（１）成果
①基盤教育と専門教育との連続性ならびに連携の重要性を発見できた。
②Moodleを使ったアクティブラーニングの具体的な手法や事例を学ぶことができた。
③地域での「実習」と「演習」とを架橋する「地域創生論」の役割を確認できた。
（２）課題
①「アカデミック・スキルズⅠ」での学びを専門教育や実習にいかにして効果的につないでいくのか、今後、検討を進める必要がある。
②「地域創生論」など、新たに設置した科目についてのピアレビューとフィードバックをさらに進める必要がある。
③そのためにも「地域創生学」の対象・方法等を明確化する作業が必要となる。

２０１９年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	エネルギー循環化学科

2．部局の実施方針、方法

方針を「1,2学年対象の基礎的な専門科目を含む科目を各学期で数科目づつ選定」とし、これに学生アンケートで評価の低かった科目を加えて、科目を選定した。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	物理化学	1	52	11			
2	環境統計学	3	63	12			
3	構造化学	3	34	13			
4	エネルギー・廃棄物・資源循環論	5	59	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

講義内容、進行などについて大きな問題の指摘はなかった。講義の工夫について、スライドそのままではなく所々が空欄になっており、説明を聞きながら自分で記入・完成させるような工夫がなされていることや板書や手描き図を学生に分かりやすいものとする工夫がなされていること、また、具体的な事例に基づき印象的な写真を示して講義進行をおこなっていること、などのコメントが多かった。

5．成果と課題

各講義で共通して、教員がおこなっている授業に対する工夫がピアレビューを通じて他の教員が知ることができたことが大きな成果だった。しかしながら同時に、修学意識の低い学生がいることも指摘されこれら学生の動機付けをいかに行っていくかが今後の課題である。

２０１９年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	機械システム工学科

2．部局の実施方針、方法

今年度は「理解度を上げるには？」というテーマで昨年度授業評価アンケートの高得点だった授業を選んで実施した。また新人の教員の授業を参観し改善点などのアドバイスを行った。さらにアンケートの低得点だった授業に対し問題の確認を行った。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	制御工学・同演習	12	43	11			
2	工学力学	9	58	12			
3	動力システム工学	9	36	13			
4	線形代数学	11	47	14			
5	力学基礎	2	58	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

評価の高かった授業において理解度を上げる上で実施されている工夫、すなわち、講義の位置づけ、小テストの実施、丁寧な説明、パワーポイントと板書の併用、演習の丁寧な解説、指名して答えさせる、スライドの様々な工夫と配布資料の効果的な活用、演習問題を事後学習に活用するなどの取り組みが効果を上げている状況を見ることが出来た。

新人教諭及び低評価授業に対しては一方的な説明の合間に質問をはさむ、ついてゆけない生徒への配慮をするなどの改善提案があった。

5．成果と課題

授業評価アンケートで高評価の授業を参観することでその理由を確認し、色々な工夫を拝見することが出来た。参考になる点は今後各自の授業に取り入れて学科の授業のレベルアップに役立てることが出来ると期待される。

授業の改善としてはついてゆけない学生への対策の必要性がわかった。

一方、参観したのは各1回の授業のしかも大多数の参観者にとっては限られた時間であったため、1コマ全体を通して、あるいは学期間を通して行われている工夫などは見ることが出来ていない。改善策として、授業後に集まって授業提供者から授業全体の説明を受けたり、参観者からの感想を述べ合う集まりがあればさらに有意義な活動となると思われる。

２０１９年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	情報システム工学科

2．部局の実施方針、方法

新カリキュラムの進行に伴なって，1年次の科目より順を追って，ピアレビューを実施する．

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	アレゴリズム入門	5	81	11			
2	コンピュータシステム	3	67	12			
3	線形代数学Ｉ	3	95	13			
4	線形代数学II	1	77	14			
5	解析学II	3	77	15			
6	確率・統計	3	80	16			
7	システム開発入門	3	90	17			
8	計算機演習II	1	77	18			
9	理工学基礎演習	1	11	19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

新規開講科目もあるが，概ね授業運営に対し，高評価であった．

5．成果と課題

1年生の科目ということで，将来に向けた意味付けが弱い科目があった．

２０１９年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	建築デザイン学科

２．部局の実施方針、方法

第一学期、第二学期のいずれかにおいて、各教員が授業公開もしくは授業参観を1回以上行う。
講義科目・演習科目・実験科目のバランスを考えながら行う。
可能な範囲で大学院の授業を対象とする。
参観者はできるだけ講座（研究分野）が同じ教員が参加するように努め、助言等を行うことにより授業の質の改善を図るが、可能な範囲で他講座の教員による相互ピアレビューも行い、講義内容の分かりやすさの観点からも改善を試みる。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎ●	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	コンクリート系構造の設計	1	55	11	建築材料実験	2	48
2	音と光の環境デザイン特論	1	28	12			
3	環境空間設計学	1	14	13			
4	低炭素建築都市デザイン論	1	48	14			
5	環境共生都市づくり論	1	43	15			
6	見学ＷＳ演習Ｉ	2	46	16			
7	構造解析学	1	21	17			
8	環境工学実験	1	38	18			
9	建築材料実験	2	50	19			
10	建築材料実験（コンクリート強度）	2	50	20			

４．出された主な意見、コメント

（大学院授業に対する意見）
　年度によって日本人と留学生の履修者数がかなり変動するので、授業運営を更に工夫する必要がある。日本人学生にとっては英語の勉強にもなるが、英語のみの学生にはやや冗長な授業になっている可能性があり、今後、工夫をしていきたい。
（学部授業に対する意見）
　学生の学習効果を高めるために、復習や小テストを行い、質問の時間を確保するなど様々な工夫が為されている。あらかじめ用意してある資料に課題の要点・注意点などが簡潔にまとめられており，さらにその中でも特に注意すべき点などについて抑揚を付けながら説明がされており，講義全体の概要が学生にわかりやすく伝わっていた。学生の「実験をやらされている感」を低減し、学生が主体的に実験に取り組む工夫を模索する必要がある。

５．成果と課題

　今年度は、昨年度に引き続き大学院授業のピアレビューを重視したため、結果として5つの大学院授業に対してピアレビューを行うことができた。また学部の授業に関しては、全て実験・演習系の科目を対象としており、全学生に対する座学形式の講義に加え、少数もしくは一対一の形式の講義や指導に対してもピアレビューを実施することができた。
　一方、大学院授業における留学生に対する配慮、授業運営の工夫の必要性が指摘されている。学部の実験・演習系の科目の場合、重量物の持ち上げや運搬、高所での作業等に関しては、安全面に対する更なる配慮と注意・指導が必要である。アクティブラーニングの積極的な導入も試みられているが、学科内での意見交換や情報共有による改善や普及にも期待したい。

２０１９年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	環境生命工学科

2．部局の実施方針、方法

・全教員が公開・参観のいずれかを行う。
・学生満足度が高い講義と低い講義に対してピアレビューを実施する。
・新カリで新しく開設された科目を積極的にピアレビューする。

3．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	物理化学実験	1	49	11			
2	地域防災への招待	1	100	12			
3	生理学	7	45	13			
4	線形代数	2	54	14			
5	未来を創る環境技研	3	50	15			
6	環境統計学	2	65	16			
7	統計熱力学	1	100	17			
8	環境リスク学	2	65	18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

・穴埋め式の資料や学生に問題を解かせて解説するなど工夫がみられるなど多くの授業で学生の授業参加を促し理解度を上げるための工夫をしている。
・スライドを使うことでイメージとして内容をつかみやすくしている。
・具体例を挙げながら丁寧に説明している。
・板書はゆっくり行われている。

5．成果と課題

・環境生命工学科の全教員が授業公開・参観を行うことができた。
・学生満足度が高い科目では学生の参加意欲・理解度を上げるための工夫がなされており他の教員の参考になった。
・学生満足度が低い科目は授業の問題というよりは、科目設定に問題があると感じた。特に環境生命工学科における数学系科目は学生の苦手意識も加わり満足度が低くなっている。今後、学生に対してどの程度まで数学を求めるのかなど学科内でカリキュラムに対する議論が必要である。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	教養教育部門

2．部局の実施方針、方法

本学における他の教員の授業を少なくとも１回ピアレビューするか、もしくは、自らの授業を１回ピアレビューしてもらう。なお、本報告書には、地域創生学群(教養・情報教育部門に所属する教員の半数が兼任)におけるピアレビューに参加した教員については記載しない。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	アカデミック・スキルズⅠ	1	40	11			
2	アカデミック・スキルズⅠ	1	52	12			
3	アカデミック・スキルズⅠ	11	40～60	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

・講義中に実施する課題として、これまで空き時間に取り組んできたタイピング練習の得点画像をWordファイルに貼り付けさせていたが、このアイディアは、貼り付けのスキルだけでなく、学生のこれまでの自主学習の成果を測るのに適しており、秀逸だと思った。
・学生が発表準備を行っている際に、順番に教卓前に呼び、前回の提出課題について講評を伝えていた。全体に向けてではなく、各学生に説明していたので、それぞれの課題点がより理解しやすかったと思われる。この方法は、手間がかかるが、各個人の反応を確認でき、教育効果が高いと思われる。
・「アカデミック・スキルズⅠ」の担当者が集まり、授業内容の共有や意見交換（主に1学期）、授業の振り返りや次年度に向けた意見交換（2学期）を実施した。

5．成果と課題

出された主な意見、コメントを見ると、コンピューターの操作スキル向上のための工夫や課題に対するフィードバックの方法など、「アカデミック・スキルズⅠ」の中心的な内容に関する工夫が見受けられる。「アカデミック・スキルズⅠ」は、アクティブラーニングを中心とした授業であり、この教授方法をいかに効果的に活用するかというアイディアが確認できた。
また、「アカデミック・スキルズⅠ」は複数の教員が担当する科目であり、その複数の担当教員が一堂に会し、1年を通して何度も意見交換を行ってきたことは評価できる。
しかし、2019年度は、実際に授業を見学するピアレビューの回数は少なかったので、今後の課題としたい。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	語学教育部門

2．部局の実施方針、方法

所属教員同士で、少なくとも年1回のピアレビューを推奨している。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	英語Ⅶ（国際関係学科）	1	24	11			
2	国際政治経済概論	1	9	12			
3	Communicative EnglishⅦ（経済学部）	1	32	13			
4	Communicative EnglishⅦ（法学部）	1		14			
5	刑法犯罪各論Ⅱ	1	110	15			
6	Communicative EnglishⅡ（経済学部）	1	27	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

さまざまな工夫がされている。

5．成果と課題

部門（部局）を越えたピアレビューも時には必要だと感じた。
また、授業参観型ではないピアレビューも検討していきたい。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	ひびきの分室

2．部局の実施方針、方法

教員相互の関心と問題意識に基づき、個別にピアレビュー対象となる授業を選定した。ピアレビューの成果については授業実施者、見学者の双方で共有し、授業運営技法の向上のための資料として活用する。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	考え方の基礎（6月24日）	1	235	11			
2	考え方の基礎（7月8日）	2	235	12			
3	英語Ⅲ（12月25日）	1	24	13			
4	環境問題事例研究（1月16日）	1	270	14			
5	環境問題事例研究（1月23日）	1	270	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

200名を超える多人数授業の運営の技法に関するコメントが多かった。多くの学生があつまる講義で、学生の集中力を途絶えさせることなく90分間の授業をいかに構成していくかという点に注目が集まっていた。

5．成果と課題

見学対象となった授業の大半が、今年度で退職する森本司先生の科目であった。国際環境工学部生の重要な科目の一つである『環境問題事例研究』などを観察し、森本先生が１年次の大人数クラスをいかに運営しているかを目の当たりにできたことはレビュアーにとって得るものが多かったと思われる。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	大学院	学科等	マネジメント研究科

2．部局の実施方針、方法

・基本的にどの講義も教員がお互いに自由に聴講できるという了解のもとで運営している。ただしマナーとしては、事前に担当教員に連絡することを申し合わせている。
・今年度のピアレビューは、基本的にはFD委員3人と関連科目教員3名が分担して、新任教員の担当講義・新規開講講義を対象に実施した。
・ピアレビューの結果は、FD委員会で報告し教育内容・方法の改善を図ることとしている。
・また、平成26年度からは、本ピアレビュー結果を授業アンケート結果とともに対象となった講義担当教員に送付することとしている。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	地域政策	2	9	11			
2	データ・サイエンス	2	15	12			
3	アントレプレナーシップ	1	21	13			
4	M&Aと戦略的提携	2	13	14			
5	企業価値評価	2	4	15			
6	ビジネス英語	2	4	16			
7	プロジェクトファシリテーション	2	10	17			
8	アジア貿易実務	2	5	18			
9	マーケティング戦略	2	18	19			
10	サービスとホスピタリティ	2	18	20			

4．出された主な意見、コメント

・資料の充実
・教員の実体験に基づくエピソードや適切な具体例などの提示
・実践を意識した授業内容や構成
・授業時の経済ニュースやホットトピックに関連したアイスブレイク
・受講生の理解を促すための工夫（前回の復習，エクササイズ，授業スピードの調整など）
・双方向性へのさらなる工夫
・教室の机やいすの配置への工夫
・理論やフレームワークへのの活用

5．成果と課題

・新任教員の方々の講義はいずれも充実した資料を作成して頂いた上で、丁寧な講義をされていた。具体例やケースの有効な活用や双方向の講義への工夫を講じることで、さらに充実した講義となると思われる。ピアレビューのフィードバックはもとより、FD委員として個別にインフォメーションすることしたい。
・ここ数年の傾向ではあるが、学生のバックグラウンドの多様化や知識・経験面のバラツキが、一層拡大しているように感じる。これらの変化に対応した講義・カリキュラムの在り方が課題になりつつある。今後も継続してFD委員内および研究科内で議論していきたい。
・上記とも関連するが、学生の受講マナーに関する報告も一部見られた。この点については、FD委員内及び研究科内、学生会とも議論していきたい。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	社会システム研究科	学科等	

2．部局の実施方針、方法

（1）方針：「社会システム総合概論」をピアレビュー科目として設定する。
本科目は、「東アジア」「文化言語」「地域コミュニティ」「現代経済」専攻の教員（各１名）によるアクティブラーニング形式の授業である。科目の目的は、専門領域にのみ関心が向きがちな大学院生に各専攻の枠を超えた複合領域的な視点と発想を持たせることにある。その実践を改善するとともに、同様の視点を指導教員も確認する。
（2）方法：院生が本科目の実施形式に慣れた段階（１学期後半）で各専攻からの教員によって実施する。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	社会システム総合概論	6	20	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

①各発表に対して担当教員が適切なコメント､質問をしていた。いずれの発表も興味深い内容であり、担当教員の丁寧な指導がうかがえた。
②研究分野の異なる院生でグループを作り、それぞれの専門分野からテーマに接近していたことも、報告に深みを与えたと思う。
③日本語でしっかりとしたプレゼンをしていた留学生がいたことが印象に残った。
④グループワークではメンバー全員の参加は難しい。研究者としての自律を考えるとグループ報告という形式の教育効果には疑問がある。
⑤議論の時間を確保するためにも、報告時間の厳守が必要である。また、各報告を関連づけるための全体討論の時間が必要ではないか。
⑥レジュメを配布すべきである。

5．成果と課題

（1）成果：「人種・民族問題」をテーマに５グループの報告・質疑が行われた。教員、学生とも限られた時間の中で､最大限の努力と準備をしてきたことが感じられる報告が多かった。領域横断的な知の獲得という本科目の目的は概ね達成されているように感じられた。担当教員の熱意や指導の適切さ、教育効果の高さもうかがえた。
（2）課題：プレゼンテーションの時間配分、院生の役割分担、グループワークの方法、質疑応答や議論の方法等、形式面での課題も見られた。受講者数の問題もあるが、教育効果がより高まる方法､運営面での改善の必要性も感じられた（何回かに分けて報告するようにして質疑応答の時間を十分確保する等）。

2019年度　ピアレビュー報告書

1．部　局	学部等	法学研究科	学科等	

2．部局の実施方針、方法

平成29年度より、法学研究科でもピアレビューをきちんと実施することとしたが、現実問題として、在籍している院生数が非常に少なく、加えて論文指導科目はピアレビューに適さない。よって各学期で1科目のみ実施することとしている。今年度も、1学期に政策系科目、2学期に法律系科目について実施した。

3．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	政策調査法	5	3	11			
2	民法D Ⅳ	1	1	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4．出された主な意見、コメント

・担当教員が学生の意見を集約し、学生がスムーズに意見を出しやすいような質問の投げ方をしていたため、双方向の演習が実現したのではないかと考える。
・授業計画に関しても、修論提出に間に合うよう、知識の定着を図る期間とそれをアウトプットする期間をバランスよく配分しており、修論を執筆するには理想的な授業だったのではないかと思う。
・（政策調査法）複数年にわたり同一の教員が行うと内容において新鮮味が欠けてくるため，次年度は異なる担当教員によるレクチャー実施が好ましいと解される。

5．成果と課題

大学院講義における問題関心・方法を教員間で共有することに資したといえよう。来年度以降も同様のFD活動を継続する予定である。もし2020年度においても政策調査法でピアレビューを行う場合には，レビュー対象者を変更することが好ましいと解せられる。

第４章

Moodleの授業活用事例

― ５名の先生へのインタビュー ―

Moodle の授業活用事例　― 5 名の先生へのインタビュー ―

はじめに

FD 活動広報ワーキング・グループでは、授業改善に関する何らかのヒントや示唆を提供すべく、毎年授業紹介を行っています。昨年度は、昨今注目を集めている「アクティブ・ラーニングの工夫」というテーマの下で、先生方の様々な工夫を特集しました。

今年度は「Moodle の授業活用事例」をご紹介いたします。本学に Moodle が導入されましたが、十分に活用されているとはいえないようです。良い授業を運営するために、既存のインフラを最大限活用することが望まれますが、どのように活用すればよいのか頭を抱えている先生方も多いのではないでしょうか。

今回のインタビューでは、試行錯誤を繰り返しながら Moodle を授業に活用されている先生方を、Moodle 活用の先進事例としてご紹介いたします。先生方の授業運営のご参考になればと思います。

以下では、本ワーキングメンバーが下記に示す 5 名の先生方のご協力のもとに、「Moodle の授業活用事例」を紹介していきます。この 5 名の先生方は、いずれも先んじて Moodle を授業に活用されている先生方であり、趣旨に賛同されてインタビューに応じていただきました。

浅羽修丈先生（基盤教育センター）　科目：情報社会を読む
佐藤敬先生（国際環境工学部）　科目：形式言語とオートマン
辻井洋行（基盤教育センターひびきの分室）　科目：技術者のための倫理
永末康介先生（基盤教育センター）　科目：Communicative English　I / II
日高京子先生（基盤教育センター）　科目：生命科学入門

インタビューでは授業の進め方、Moodle の活用法とその利点、現行の Moodle への要望、学生のやる気の引き出し方、学習評価方法、事前・事後学習を促す工夫などについてお聞きしました。今回のインタビューで聞くことのできた方法や工夫は、本ワーキングメンバーも真似してみたくなるようなものばかりでした。関心のある方は、今回のインタビューに応じて頂いた先生方から、直接お聞きになってみてはいかがでしょうか。

なお本章の作成にあたり、作成方針やインタビューの質問項目などにつきまして、本学 FD アドバイザーの中溝幸夫先生より有益なご助言を数多くいただきました。記して感謝申し上げます。

ワーキンググループメンバー：
畔津憲司、白石麻保、白石靖幸、藤田尚、永末康介

面白いことを学生と一緒に考える浅羽修丈先生（基盤教育センター）

【科目名】 情報社会を読む
【配当年次】 2年次
【選択・必修の別】 選択
【受講者数】 約300名
【他学部他学科が受講可能かどうか】 基盤教育科目
【授業の内容】 授業のねらいは、最新の情報通信技術（ICT）やそれを応用したサービスについての理解を深めることで、現在の情報社会について概観し、その先の未来で待ち受けている情報社会の課題や可能性について考える力を身につけることである。

1. 授業の進め方

最新のICTを使った様々なサービスを紹介した上で、将来、ICTを用いたどんなサービスができるのかを考え、未来像を推測していく。「皆で面白いことを考えていこう」ということが、授業のメッセージである。普段の講義では、60分程度の講義を行った後に、20分程度の時間をとり、課題に取り組んでもらう。授業中に問題を提示し、解答してもらうこともある。また1グループあたり2～5名のグループに分かれ、テーマに沿ったICTを用いた新しいサービスに関して議論してもらう。グループ別にワークシート（紙媒体）を配布し、議論の成果物として、アイディア、その利便性と欠点、アピールポイントを記入してもらう。その後、ワークシートを他グループと交換して、他グループのアイディアを評価する。なるべく多くのアイディアに触れてもらうことが目的である。

2. 授業へのMoodle活用について

①授業でMoodleをどのように活用しているか

1つは「レスポンスアナライザー」機能としてフィードバックを活用している。例えば授業中に選択式の問題を提示し、学生にスマホから解答してもらう。この機能を用いると学生の解答は、すぐに集計され、グラフ化される。その結果を学生にフィードバックした上で授業を展開している。

もう1つは、学生のアイディアをMoodle上にアップして共有化することに利用している。これらによって大規模授業であるが、多くの学生間で意見を共有することができる。

②授業でMoodleを活用することの利点とは何か

大規模授業では、多くの学生の発言を記録したり、聞いたり、評価したりといった管理が難しいため、アクティブラーニングを行う上でもMoodleの活用は効率的である。またMoodleを活用することで、他の学生がどんなことを考えているのかといったことを瞬時に学生間で共有化できるため、学生が他者の多くの考えに触れることができる。

③現行の Moodle への要望等

デモ用の学生 ID を教員に発行してもらえると助かる。現行でも教員 ID を用いて学生画面を表示・閲覧することはできるものの、学生と同じように課題への解答やアンケートへの回答がデータとして処理されることはない。教員が Moodle 上で課題やアンケートを作成し、その解答や回答のデータ処理を設定する際に、正常に作動するかを確認するためには、現行の教員 ID では不十分である。

3. その他の授業について

①学生のやる気をどう引き出すか

授業で扱うテーマと学生自身の日常生活との関連性を強調している。学習動機付けモデルの ARCS モデルでいうところの Relevance（関連性）によって、やる気が刺激できるのではないかと考えている。またグループディスカッション、レスポンスアナライザーを利用したフィードバック、事後のアイディア提出、他者のアイディア評価などにより、授業への参加を促している。授業出席者の授業参加状況としては、授業中の問題や課題に対する投稿率は 7 割強、個人によるアイディアの投稿率は 6 割である。

②学生の学習評価をどのように行っているか

授業の性質上、毎回の授業における課題の取り組みを主に評価している。毎回の課題の内容は授業スライドからの出題が 60%、口頭説明からの出題が 40%である。したがって、最低限授業スライドの内容をメモすれば単位認定水準の評価となる。積極的に授業に参加し、アイディアの提出などを行った者には加点していき、高い評価となる。

③事前・事後学習を促す工夫は

授業時間中に新しいサービスのアイディアを考え出すことは難しい。そこで次回授業でどのようなアイディア出しを要求するかを説明しておく。学生は次回授業までに思考を巡らせることになり、それが事前学習となる。事後学習としては、授業でいろいろなアイディアに触れた上で、さらに新しいアイディアを思いついた場合、後日、提出してもらうことになっている。アイディア提出に対しては加点し、良いアイディアであれば授業で紹介している。ただし、このアイディア提出数は 1 回授業当たり 3～8 件とやや少ない。

④「自己調整シート」

学生に、自身の受講状態を記録する「自己調整シート」（紙媒体）を記入してもらっている。学生は授業前に、今日の気分や体調はどうか、授業をどのような姿勢で受講する予定か等を記録し、授業後に受講の姿勢を自己評価する。この自己調整シートを見ると、自身の受講状態を省察することができる。なお、この自己調整シートを出席管理にも使っており、毎回の授業後に SA が出席状況を記録する。

（文責　畔津憲司）

きちんとした佐藤敬先生（国際環境工学部情報システム工学科）

【科目名】形式言語とオートマトン[1]
【配当年次】2 年次
【選択・必修の別】選択
【受講者数】30 名程度
【授業形式】講義
【他学部他学科が受講可能かどうか】不可
【授業内容】「形式言語」と「オートマトン」の概念を通じて計算の原理について学ぶ。コンピューターサイエンスの多くの分野で基礎となる知識を学ぶだけでなく、抽象的な思考と厳密な論証を行う力を身につけることも狙っている。

1. Moodle 活用について

レポート課題の提出機能はもちろんのこと、他の機能も積極的に活用している。

この授業科目では、授業の理解度を確認するために簡単なテストを授業中に出し、出席カードの裏面を使って解かせているが、この解答へのフィードバックをオフライン課題を使って個別に与えている。

学生の授業外学習のために小テスト(Quiz)を提供することも試みている。この小テストは授業の復習用という位置づけであり、複数回挑戦できる。小テストを活用することで、教員の授業準備や採点の負担を低減できるだけでなく、学生がつまずいている箇所を可視化できる。

・現行 Moodle への要望等

提出された課題を効率よく評価入力できることを望んでいる。点数のみの評価入力であれば学籍番号順にソートされた一覧内に直接書き込むことができる。しかし、オフライン型の課題では、個別のフィードバックを PDF ファイルで与えることが難しい。

2. その他授業について

・学生のやる気をどうひきだすか。

身近なものや社会との接点があるテーマを題材にして関心・興味を持たせることが、やる気を引き出すきっかけとして有効である。例えば、この授業科目では電卓プログラムの設計を、数学科目では Google の検索エンジンの仕組みを単純化したモデルを取り上げている。また、学んだことについて自分の言葉で説明や議論を行わせることも、理解を深め、学生のやる気を引き出す上で有用である。

---

[1] ただし、「2. Moodle の活用について」、「3. その他の授業について」においては、それ以外の科目での取組も含む。

・学生の学習評価をどのように行っているか。

シラバスで明示した基準（中間試験、期末試験の点数および日頃の受講状況（事前課題、小テスト、宿題など））に従って成績評価を行っている。試験では、いろいろな観点から学習状況を確認するために、単なる計算問題や穴埋め問題だけでなく、理由を説明する正誤判定問題などの記述式問題を含めて出題している。出題内容やレベルに偏りがないように、学習項目別の到達度を表すルーブリックを定めている。

・授業でどのような工夫を行っているか。

学生を指名して質問するなど対話的な授業を行うように心がけている。質問に対する回答の様子は学生の理解度を知る手がかりとなる。また、教えるべき項目はポイントを絞り、学習内容が過多にならないよう、配布資料は A4 判で片面 4 枚程度、プレゼンテーションは 18 スライド程度（6 スライド × A4 判 3 枚）で収めている。

・事前・事後学習を促すようにどのような工夫を行っているのか。

事前・事後学習で行うべきことを Moodle 上で明記し、演習問題・宿題の解答や解説を公開している。事前学習では、前回までの学習内容や授業に関連する前提知識の確認に関する問題を出題している。事後学習では、教科書の演習問題や宿題に取り組むように指示し、それらの内容を試験の出題範囲に加えている。

3. インタビューを終えて

学生のことをきちんと考えた上で合理的に授業設計がされており感服した。普段お話しする機会のない部局が異なる先生にインタビューできた上でこのような学びが得られたことに非常に満足している。それより何より、このインタビューを受けていただいた佐藤先生に感謝申し上げたい。

（文責　永末康介）

履修学生同士の学び合いを促す辻井洋行先生（基盤教育センターひびきの分室）

【科目名】工学倫理（新カリ・技術者のための倫理）
【配当年次】３年次
【選択・必修の別】必修
【受講者数】250～名（100 名及び 150 名の 2 クラス編成）
【他学部他学科が受講可能かどうか】他学部受講不可
【授業内容】技術者が直面する公衆を巻き込むような業務上の課題について、実際に起きた事故や企業不祥事などの事例を学び、倫理的行動の意思決定のためのメソッドを用いながら、個人やグループとしての妥当な行動設計を行う。

アクティブラーニングの工夫（具体的な施策）：履修学生同士の学び合いに力点

1.　科目運営の考え方

技術者には、公衆を巻き込むような業務上の課題に直面した時に、専門家として、その解決に向けた意思決定が求められる。倫理的な判断における不正解は、明確であり、社会的・経済的な弱者である公衆や消費者の生命や財産を犠牲にすることである。ただし、公衆や消費者、共に働く会社の同僚や組織、取引相手など、ステイクホルダーの利害を調整し、納得を得るような正解については、いくつもの選択肢を創り出すことができる。この授業では、個々の履修者が同級生の考える倫理的行動からインスピレーションを得て、自分自身の考えを展開していくことに価値があると考えている。そのため、教室では、履修者同士が建設的な意見交換をできるような授業設計を行っている。

2.　実際の授業の進め方

この科目では、基礎知識は、履修者自身に教科書を予習することによって獲得させ、授業空間では意見交換やグループワークによる回答作りに取り組ませている。具体的な流れは以下の通り。

(1)前回授業に関する Q&A
(2)当番班による事故や企業不祥事など事例に関する紹介プレゼンテーション
(3)事例に関する予習と質問の提出
(4)教師による解説や関連知識の提供
(5)事例の理解を進めるためのワーク
(6)振り返りカードによる質問の提出

3.　Moodle の活用について

(1)授業で Moodle をどのように活用しているか。
　(a)各回で扱う教科書内の事例を読み質問を提出させる。
　(b)振り返りカードに記入のあった質問への回答を FAQ として Moodle 上のブックレットに記入し公開する。
　(c)教科書内の理論的内容の講読と理解の程度を確認するため、小テスト機能を用いて「クイズ」を作成し回答させる。
　(d)事例紹介当番班が作成したスライドは、フォーラム機能を使って提出させ、事前に他の履修者が閲覧できるようにしている。
　(e)当番班が、スライドを作成する際に用いるウェブ資料は、Moodle 上にリンクを掲示して提供している。

(2)授業でMoodleを活用することの利点とは何か。
(a)授業資料の提供を紙印刷と電子媒体とで、仕分けて提供できること。
(b)各回の欠席者への資料を電子媒体で済ませられること。
(c)授業内容に関するQ&Aを電子アーカイブにして、次年度の履修者にも提供できること。
(d)小テストでは、選択式問題であれば、採点を自動集計できること。
(3)現行のMoodleへの要望等
(a)オンラインテキストで提出させた課題をMS-Word形式で出力し、ファイル内のヘッダかファイル名に提出者の学籍番号と名前が反映されるようにして欲しい。
(b)Moodle内でウェブ版のMS-Officeアプリを展開できるようになれば、作成したファイルのアップロード作業が不要になる。
(c)Moodle 上のひとつの科目ページ内の記入内容のリンクを別の科目ページ内に貼付できるようになれば、同じ内容のファイルを別々にアップロードする必要がなくなる。

4. その他授業について

(1)学生のやる気をどうひきだすか。
(a)履修者同士がお互いに教え合う、学び合うように促すようにしている。
(b)履修者が、長時間、聞き手になることを避け、時間を区切って進行している。
(c)提出課題には、ルーブリックを添付することにより、履修者が何について努力すればよいのかを示している。
(2)学生の学習評価をどのように行っているか。
(a)当番班による事例紹介スライドやグループワークでの作成レポートは、ルーブリックを予め示している。スライドについては内容と体裁のチェック、グループワークについては思考内容についての確認を行っている。
(b)教科書に掲載されている基礎知識についての理解度は、期末試験で確認している。
(3)授業でどのような工夫を行っているか。
(a)教科書に書かれている内容について、教師が長々と解説を続ける時間をなるべく減らし、履修者同士が意見を交わす時間をなるべく多く取れるように工夫している。
(b)事例紹介については、当番の履修者グループに登壇させている。同級生が登壇することにより、履修者の目先が変わり、傾聴する姿勢を引き出し易くなると考えている。
(4)事前・事後学習を促す工夫は。
(a)事前事後の学習として、教科書を読んでもらう際には、Moodle上に該当箇所を読まなければ解答できないような確認クイズを設置し解答させている。また、その採点も行って成績に組み込んでいる。
(b)授業後には、必ず振返カードを記入させ、学びを総括させている。また、質問を作らせることによって、授業中に得た知識･経験を元に考える機会を作っている。

5. インタビューを終えて

学部3年次であっても、倫理に関する講義は工学系の学生にとって非常にハードルの高い講義かと思います。この点、辻井先生は事例紹介を通じて倫理観の重要性を学生に伝えつつ、グループワークによる学生間の意見交換や学生による登壇（プレゼンテーション）を課すことによって、講義への積極的な参加を促している。またMoodleに関しても上記に紹介した通り、その機能を最大限に発揮するかのように様々な状況で活用している。今回、辻井先生からは紙面には収まりきらないほど沢山のお話を伺うことができた。辻井先生の授業運営方法に関して興味のある先生は直接、問い合わせてみては如何でしょうか？きっと晴らしいヒントが頂けるかと思います。（文責：白石靖幸）

個別指導を通じてクラス全体の最適解を模索する永末康介先生（基盤教育センター）

【科目名】Communicative English I / II
【配当年次】1年次
【選択・必修の別】必修
【受講者数】35名程度
【他学部他学科が受講可能かどうか】受講不可
【授業内容】基礎的な英語能力の定着を目的としており、文法能力・語彙力に加えて主に読む力と聴く力の向上を目指す。

1. 授業の進め方

教材は主に英文記事・図書館所蔵の英語多読図書・web 上で自由に活用できる TED Talk などを使っている。授業時間の多くを割く英文記事のリーディングでは授業 2 回分を使い、初回は学生が対象記事について各自で「自習」を行い 2 回目の授業開始直後に学生は記事の内容理解のための小テストを 20 分程度受けて、その後記事の内容に関わる作業を個人または複数で行う。

2. Moodle 活用について

①授業で Moodle をどのように活用しているか。

学生は、1）アップロードされた英文記事などの授業資料を取得する、2)「自習」での作業成果、英文に関する疑問などを記したノートを画像データで提出し、事前学習時間や学生の主観による記事の理解度をアンケート形式で回答する、3）授業 2 回分の後半（上述【授業内容】における「2 回目」）での小テスト後にも対象記事の内容理解のための学習時間や小テストの結果を受けた学生主観による記事の理解度をアンケートで回答する、4）授業資料（記事）の日本語訳や記事理解に役立つ資料、例えば重要語句や他学生の疑問に対する教員の回答などを閲覧する、5）授業課題を提出する、6）担当教員が参考としてアップロードしている、授業には直接関係ないが英語学習に関する各種資料を取得する、などに Moodle を活用する。担当教員は、1）資料配布、2）学生の各種提出物の集計、3）授業に関する連絡を載せる、などで Moodle を活用している。

②授業で Moodle を活用することの利点とは何か。

学生にとっては、授業欠席時の授業資料受け取りや、上述のような資料の内容理解に役立つ情報の取得、他学生の質問への担当教員からの回答の閲覧などによる学生自身の理解度の上昇に Moodle 活用は合理的で有効であると考えられる。

教員にとっては、授業資料配布や学生の理解度把握などにおいて作業効率を高める、また学生の理解度把握という点では必要なデータを可視化できるという点で Moodle 活用の意義がある。特に強調されるのは、より多くの教員がこのような（同一の）LMS（Leaning Management System）を用いて授業をおこなうことで、学生はそれぞれの授業連絡や資料の取得、課題提出などのネット上での確認が全体としてスムーズになる点である。これは個別の講義担当者とその講義の受講生、という関係の中でのみ捉えられる部分的な合理性・効率性だけを指していない。Moodle を使う教員の増加で、学生も次第に Moodle 上での資料や課題の確認を前提とした行動を採るようになることが予想されるため、全体としての教員 - 学生双方の利便性、効率性の向上、いわばネットワーク外部性の発生が期待できる。

③現行の Moodle への要望等

教員が課題（レポート）提出の確認や成績評価、採点を行う際、学籍番号順への並べ替えが難しい。そのため次の点を改善できないか。つまり、提出された複数の学生（担当講義・クラスそ

れぞれの受講者）からの課題など電子データをダウンロードする場合、現状ではそのフォルダを学籍番号順でソートできない（と認識している）。そのため、履修名簿上で学籍番号順に並んでいる学生の成績評価を行う際に不便である。この点を改善してほしい。

3. その他授業について

①学生のやる気をどうひきだすか。

むしろやる気を削がないことが重要である。その工夫としてシンプルで明確な方針を最初に示す。具体的には他人の邪魔はしない、やるべきことはやる、というもの。また、学生間で進捗状況が異なるため質問は個別に受け付ける（分かっている学生を「邪魔」しない）、授業資料にコメントを付けて Moodle 上に載せておく、などしている。

②学生の学習評価をどのように行っているか。

小テストと「自習」作業では各資料の講読開始時に 2 つの作業コースを準備して学生にどちらかのコースを選択させる。この 2 つは評価点の上限が異なり、学生はそれを踏まえて選択する。両コースは作業量や義務として課される課題量に違いがあるので、学生はその時の状況（他科目の課題が重なって負担大、など）を勘案して選択できる。評価は両コースの各評価点上限を踏まえそのコースの中での成果によって決まる。

③事前・事後学習を促す工夫は

事前、事後学習時間や学生に理解度を問うアンケートが頻繁に実施されており、これにより学生の事前事後学習への意識が高まると考える。また moodle 上に授業資料以外の各種ファイル、動画がアップされている。これは個々のコンテンツを必ずしも理解できなくても、それらがアップされている意味を学生が考える機会となれば、という考えに基づく。

④授業でどのような工夫を行っているか

学生によるノート作成に工夫が施されている。ノート作成は参考文献を参照し、効果的なノートのとり方を学生に指導している。ノートは授業数回に一回、多いときには同じ授業時間内に複数回 Moodle 上で提出させる。小テスト後に日本語訳を公開するのでそれを見て各自ノートに加筆できる。

教員は授業前を含む授業外での準備に重点を置き、授業では学生各自がそれぞれの進捗状況にそって作業を進める。理解度の向上を効果的に図るには、教員はむしろ授業外での準備に重点をおくほうがよい。例えば Moodle 上に質問に対する回答やコメント、説明を載せておくなどを行い、授業中は「分からない」学生を個別に指導する（「分かっている」学生が作業を進めるのを「邪魔」しない）方が、結果としてクラス全体の教育効果は大きい。つまり、作業の進捗状況が異なる学生間で、ある学生の質問に対する説明をクラス全体に対して行えば、その質問への回答を当面必要としない他の学生の作業を止めてしまう。そこで質問には個別に対応し、それを必要としない学生は作業を続ける、というスタイルを採っている。このスタイルであれば学生各自のその時点における習熟度や進捗状況を起点として各々レベルアップを図ることができるので、結果、クラス全体の学習効果向上を期待できる。このやり方はクラス全体の学習効果に対する最適解を最も重視するという考えに依る。

4. インタビューを終えて

Moodle のようなツールの利用による多方面からの学修行動や学習効果向上へのアプローチが可能となること、より多くの教員によるツール活用、LMS への認識が共有される重要性、など大きな視点からお話も伺うことができた。ツール活用にとどまらず、部局を超えた広い視点からの教育とそれによる効果にも言及された今回のインタビュー内容は、インタビュアーにとって非常に示唆に富んだものであった。

（文責　白石麻保）

学生の意欲を引き出すのが上手な日高京子先生（基盤教育センター）

【科目名】生命科学入門
【配当年次】1 年～4 年
【選択・必修の別】選択
【受講者数】388 名
【他学部他学科が受講可能かどうか】基盤教育科目

1. 授業内容及び進め方

授業は、人体が構成する細胞と遺伝子の不思議を学ぶことによって、新しい時代を生き抜くための生命科学の基礎知識を身につけることを目標としている。また、学生には単に知識の詰め込みだけではなく、生涯興味をもって自分で学べるような能力を身に付けてほしいと考えているとのことであった。

授業の進め方に関しては、座学での授業の他に、Moodle を活用した小テストや課題の提出、Moodle で質問を受け付け、次回までに回答を提示するなど、授業時間外での学習時間が自然と確保できるような仕組みになっている。

2. 授業への Moodle 活用について

①授業で Moodle をどのように活用しているか。

小テスト（簡単なミニクイズ）及び課題（1,000 字以下のミニレポート）を毎回提出させ、学んだことの確認を行っている。この他、関連 URL や授業で使ったスライドをアップし、事後学習にも役立ててもらっているとのことである。

特に、フォーラム機能を使用した学習がユニークであり、学生が関心あるドラマや映画と授業の内容をリンクさせて、学生同士が Moodle 上で対話を行っている。また、授業内容をさらに発展させ、学生自らが授業に関連するテーマを Moodle にピックアップし、教員が知らない言葉やテーマについて論じる等、時間外学習が自然と確保できるような構成になっている。さらには、小テスト及び課題の提出率が終盤でも非常に高く、課題を解く際には、添付のファイルが参考になる等の工夫が凝らされており、Moodle の活用方法が適切であるといえる。

②授業で Moodle を活用することの利点とは何か。

Moodle に限らず、授業ごとに学習成果を確認していくことは、学生のモチベーションを上げることにもつながる。大規模講義では、Moodle を使うことでこのことが可能となる。

③現行の Moodle への要望等。

A-101 教室では一度にアクセスできる数が限られており、その場での利用が難しい。授業の中で学生の反応をすぐに見るような使い方をしてみたいので、利用環境の改善を望む。

3. その他授業について

①学生のやる気をどう引き出すか。

上述のとおり、授業ごとに成果を確認していくことのほか、学生にとってドラマや映画などの身近な話題を取り上げることを心がけている。

②学生の学習評価をどのように行っているか。

毎回の小テスト及び課題により評価している（合計 14 回分）。昨年度までは、定期試験も行っていたが、毎回の課題の点数と定期試験の点数の間には正の相関が見られたため、今年度より試験なしとした。

③授業でどのような工夫を行っているか。

Moodle に書き込まれた「質問」を取り上げ、授業のはじめに質問に答える形で、前回の授業の振り返りを行う。

④事前・事後学習を促す工夫は何か。

事前学習は、「わからない単語を調べておくように」という簡単なもので、あまり実施できていないと思う。事後学習は、上記の課題の締め切りを 1 週間とし、次回の授業までに必ず振り返るようにしている。また、学生が隙間時間を使うことで時間外学習が向上しているようであるとのことだった。

⑤その他

「生命科学入門（人間と生命）」は、他の生命系の座学の講義である「生命と環境」「生命科学と社会」同様、「理系」の内容となっており、文系キャンパスの学生にとってはやや難しい内容となっている。しかしながら、Moodle 導入後は、授業の満足度、授業外学習時間において明らかな上昇が見られ(この点に関しては､2018 年 3 月 28 日実施の FD 研修｢Moodle 活用実践事例」の際にデータ提供あり)、確かな手応えを感じている。今後も工夫を重ね、より良い、学習効果の高い授業として行きたい。

（文責：藤田　尚）

第５章

FD 委員会について

(1)活動概要

今年度、FD 委員会に設けられた３つのワーキング・グループ（以下、WG）の活動を振り返ってみよう。

研修 WG では、昨年度の FD 委員会において各学科・部局に研修希望調査を行った結果、提案された全学研修計画を今年度も実施した。以下に示す３回の FD 研修会が行われた。

北方キャンパスで行われた全学研修は、①『大学教育再生加速プログラム事業 FD 研修「学生の授業外学習時間を促す授業の工夫」』（大学教育再生加速プログラム運営委員会および AP 事業推進室主催　10 月３日開催）、②『体験を通した学び―アクティブラーニングの是と否』（地域創生学群主催　11 月 27 日開催）。③『初年次教育を考える―基盤教育科目のアカデミック・スキルズを例に』（基盤教育センター主催　2020 年１月 29 日開催）の３つであった。（各研修への参加者数、参加者のアンケートの結果などについては、以下のページに示す研修報告を参照。）

FD 活動広報 WG では、今年度の授業紹介のテーマとして「Moodle の授業活用例」をとりあげ、５つの授業を紹介した。５つの授業科目とその担当者を WG 内で選定し、各科目担当者に WG メンバーがインタビューし、その結果を文章化して FD 委員会報告書に掲載し、本学ホームページ上で公開した（本報告書の第 4 章「Moodle の授業活用例」を参照）。また、昨年度の報告書と同様に、できるだけ多くの教員が本報告書を閲覧することを期待して『FD 活動報告書』（資料室版）の構成や資料室ファイルの表紙を工夫した。

授業評価 WG では、各学期においてすべての授業について『授業評価アンケート』が Moodle 上において、受講学生を対象にして採られた。

一方、『春季新任教員研修』については、委員長、副委員長、FD アドバイザー、教務係 FD 担当者による春季新任教員 FD 研修が、例年のプログラムにしたがって実施され、10 名の新任教員、11 名の既在籍教員が参加した。研修の目的は、①新任教員に本学の FD 組織や FD 活動を理解してもらうこと、②授業の質向上をテーマにした既在籍教員とのグループ討論や質疑応答を通じて、大学教員として授業の質向上に関心をもってもらうことであった。FD 研修後に行ったアンケート結果によると、新任教員研修の参加者からは、おおむね好評であったという意見が寄せられた。とりわけ「授業をめぐる既在籍教員とのディスカッション」「授業での重要事項や工夫のし方」「教育の重要性」などが印象的だった。

『夏季新任教員研修（テーマは、「１学期授業の振り返り」）』は、8 月 27 日に実施され、新任教員 10 名、既在籍教員 5 名が参加した。こちらも研修後のアンケートによると、約 8 割の参加者からは「よかった。」という反応が得られた。授業の振り返りの改良点としては、“研修の前までに授業アンケートの結果がわかったほうがやり易い”などの意見（実際の授業実践の紹介）があった。

また、各部局単位で、それぞれ独自の方法によって授業のピアレビューが行われ、学期ごとに FD 委員会に報告書が提出された。

(2)活動一覧

＜FD 委員会＞

日程	回	内容
4 月 24 日	第 1 回	【議題】 1.　委員構成について 【報告】 1.　2019 年度春季新任教員研修実施報告 2.　2019 年度 FD 活動の推進予算配当結果について 3.　大学教育学会第 41 回大会について 【その他】 1.　2019 年度 FD 委員会開催予定
6 月 26 日	第 2 回	【議題】 1.　授業評価アンケート Web 化と試行について 【報告】 1.　大学教育学会第 41 回大会報告 【その他】 1.　FD 図書購入希望について 2.　1 学期ピアレビュー実施報告の作成について
8 月 7 日	第 3 回	【議題】 1.　2020 年度 FD 活動推進予算について 2.　夏季新任教員研修の実施について 3.　2019 年度 FD 研修の実施について 【報告】 1.　各 WG の進捗状況について 【その他】 1.　FD 図書購入希望について 2.　1 学期ピアレビュー実施報告の作成について
11 月 20 日	第 4 回	【議題】 1.　授業評価アンケート Moodle 実施方式への移行について 【その他】 1.　FD 必修研修出席状況について 2.　FD 図書購入について
12 月 11 日	第 5 回	【議題】 1.　授業評価アンケート Moodle 実施方式への移行について
1 月 29 日	第 6 回	【議題】 1.　各 WG の進捗状況について ・FD 活動広報 WG ・授業評価 WG ・研修 WG 2.　2020 年度春季新任教員研修 【報告】 1.　2019 年度夏季新任教員研修実施報告 2.　1 学期ピアレビュー実施報告 3.　2020 年度 FD アドバイザーについて

1月29日	第6回	【その他】 1.　2学期ピアレビュー実施報告書の提出について 2.　年間ピアレビュー実施報告書の提出について 3.　2019年度FD活動報告書の提出について 4.　2020年度FD活動計画書の提出について 5.　2020年度FD研修希望調査票の提出について
3月26日 （メール会議）	第7回	【議題】 1.　各WGの活動状況について 2.　2019年度FD活動報告について 3.　2020年度FD活動計画について 【報告】 2.　2学期ピアレビュー実施報告について

＜研修・講演会等＞

日程	項目	講師等
4月2日 4月3日 4月4日	春季新任教員研修 （制度研修、FD研修）	3ページ参照
8月30日	夏季新任教員研修	中溝　幸夫 （FDアドバイザー）
10月30日	全学FD研修 学生の主体性を促す授業の工夫	22ページ参照
11月27日	全学FD研修 体験を通した学び ～アクティブラーニングの是と非～	和栗　百恵 （福岡女子大学国際文理学部　准教授）
1月29日	全学FD研修 初年次教育を考える ～基盤教育科目のアカデミック・スキルズⅠを例に～	廣渡　栄寿 （基盤教育センター　教授） 神原　ゆうこ （基盤教育センター　准教授）

(3)委員構成

2019 年度の FD 委員会は委員長 1 名、副委員長 1 名、委員 16 名、アドバイザー1 名で構成される。

役割	氏名	所属	職名
委　員　長	柳井　雅人	経済学部経済学科	教　授
副 委 員 長	高橋　衛	法学部法律学科	教　授
委　　員	齊藤　園子	外国語学部英米学科	教　授
委　　員	白石　麻保	外国語学部中国学科	教　授
委　　員	李　東俊	外国語学部国際関係学科	准教授
委　　員	畔津　憲司	経済学部経済学科	准教授
委　　員	別府　俊行	経済学部経営情報学科	教　授
委　　員	高山　智樹	文学部比較文化学科	准教授
委　　員	田中　信利	文学部人間関係学科	教　授
委　　員	藤田　尚	法学部法律学科	教　授
委　　員	中井　遼	法学部政策科学科	准教授
委　　員	稲月　正	地域創生学群・社会システム研究科	教　授
委　　員	寺嶋　光春	国際環境工学部エネルギー循環化学科	准教授
委　　員	白石　靖幸	国際環境工学部建築デザイン学科	教　授
委　　員	永末　康介	基盤教育センター	准教授
委　　員	浅羽　修丈	基盤教育センター	教　授
委　　員	池田　隆介	基盤教育センター（ひびきの分室）	教　授
委　　員	高橋　秀直	マネジメント研究科	准教授
アドバイザー	中溝　幸夫	FD アドバイザー	教　授

第６章

おわりに

あとがき ― この一年のFD活動を振り返って

中溝 幸夫（FDアドバイザー）

2019年度における本学のFD活動を振り返って、私の印象に残っている２つのFD活動について述べてみたい。一つは、基盤教育センターが今年度、開講した授業科目「アカデミック・スキルズⅠ」についての報告（研修）である。もう一つは、私自身が昨年度のFD委員の協力を得て今年度作成した「授業設計・自己評価のためのチェックリスト」である。

■ボトムアップFD活動の理想像

基盤教育センターが新たに開講した授業科目「アカデミック・スキルズⅠ」は、授業そのものがチャレンジングであるばかりでなく、この授業をめぐる活動のすべてが、ある意味、ボトムアップFD活動の目指す“理想像”ではないかと考える。

今年度に行われた研修の公式のタイトルは、『初年次教育を考える ― 基盤教育科目のアカデミック・スキルズⅠを例に』であった。研修の狙いは、今年度からスタートした授業科目「アカデミック・スキルズ」の授業目標や授業の大まかな流れ、学習内容、授業手法などを紹介することであった。（詳しくは、研修報告を参照。）　この授業のコンセプトは、「アクティブ・ラーニングを取り入れながら、考える力の基礎となるスキルをつけること。」である。

私は、この研修に出席して、このような授業の進め方、このような研修こそ本学を代表するボトムアップのFD研修ではないかと思った。以下、その理由についてのべてみたい。

研修では、この授業に対する学生の反応とともに、教員の側の振り返りとして“FDの充実”という結果も報告された。なぜFDが充実していたのだろうか？　私なりにその理由について考えてみた。３つの理由があると思う。①この授業に関わった基盤教育センターの教員のチームワーク（チーム・エデュケーション）として授業に取り組んだこと、②新たな授業科目へのチャレンジであったこと、③同じ科目を複数の教員が担当したことである。

研修後、この授業を担当した教員のひとりとメールでコミュニケーションを執った。その教員のメール内容を紹介したい。

『・・・アカデミック・スキルズⅠは、その準備段階から関係者が定期的に集まり、いろいろな意見交換を行いながら、作り上げていきました。今年度、授業を実施してみて予定通りにいかない部分も多く、悩みを共有しながら、取り組んできた一年でした。今は、来年度に向けて、振り返りを行っている最中であり、私たちとしてはPDCAサイクルを回しつつ、良くなっていけばと思っています。しかし、学生にとっては一年限りのものであるため、そのことを考えると、最善のものを提供しなければなりません。・・・正直、不安のほうが多い一年でしたが、関係する事務職員の方々も含めて多くの人々に支えられてこのFD研修にまでたどり着くことができました。これで終わることなく、これから来年度の学生に対し、さらに良いものを提供できるように、チームとしてまとまって取り組んでいきます。・・・』

上に示した担当教員とのコミュニケーションの中には、FD の観点から重要な授業改善のための３つのポイントが述べられている。①授業設計のために、チームとして取り組んでいること＜チーム・エデュケーション＞。②授業の質向上の基本として PDCA サイクル（計画・実行・評価・改善）を実行していること＜PDCA サイクル＞。③学生にとってベストな授業の展開を目標にしていること＜学生ファーストの授業目標＞。

これら３つのポイントは、授業改善を目標にしたときの FD 活動のポイントである。アカデミック・スキルズの場合、まず授業担当者が定期的に集まって意見交換しながら、授業計画（P）を練っていった。今学期、その計画に基づいて授業を実践してみた（D）。その結果を（学生の反応を含めて）いろいろな角度から分析して、授業全体をチェック（評価）した（C）。（この評価の一部として、今回の「授業実践報告」（研修）があった。）その後、担当した教員チームは、さらに授業の振り返りをおこなっていく予定である。このように、PDCA サイクルを回しながら授業改革をやっていけば、来年度は、さらにグレードアップした「アカデミック・スキルズ」が実践されていく（A）だろう。

教育をチームとして捉え、チームとして PDCA サイクルを回しながら、授業の質を向上させていくことは、今後、ますます必要になっていくと思う。これまでは（あるいは今後も）、一人の教員だけである授業を担当し、実践の結果を一人で振り返り・・・一人で PDCA サイクルを担っていくというのが普通だった。（オムニバス授業はその限りではありませんが、これまでのオムニバス授業の多くは、一人の授業をただ単に重ねあわせていくことが多かったと思う。）　今回のアカデミック・スキルズの授業は、チーム・エデュケーションの非常によい例証だと思う。本学では、これからもこのようにチームで授業の質向上に取り組むことが、ミクロレベルの FD を進めていく上で、不可欠だと考える。

■授業設計と授業の自己評価のためのチェックリスト

どの教員も授業の質向上のために、自己の授業を“振り返って”なんらかの観点から評価・点検し、それに基づいて次の授業を設計していくと思う。そのために、授業設計と評価のための「チェックリスト」があれば、便利だと考えた。その結果、生まれたのが、以下にしめす『授業設計・授業自己評価のためのチェックリスト』である。

2019 年度のはじめこのチェックリストの原案を作成し、2018 年度の経済学部 FD 委員の山下剛先生（経済学部）と基盤教育センターの FD 委員である浅羽修丈先生（基盤教育センター）にコメントをいただいた。（お二人の先生には、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。）

本チェックリストは、主に「講義を中心にした授業科目」のためのチェックリストで、作成目的は「授業の質の向上」を目指した、授業設計と授業評価・点検のためである。ミクロレベル（個々の授業レベル）の FD を進めると、「授業の画一化」につながるという考えがある。しかし、本チェックリストの狙いはまったくその逆で、各教員の「個性的な授業」を大学の授業の理念の一つと考えています。例えば、チェック項目の一つに 『授業にアクティブ・ラーニングを取り入れているか』 という項目があるが、アクティブ・ラーニングのやり方については、いろいろな方法があるので、各教員がそれぞれ自分の授業科目に適した独自の方法を工夫して取り入れていけばよいと考えている。

授業設計・授業自己評価のためのチェックリスト

【作成者】中溝　幸夫（FD アドバイザー）

【はじめに】

□本リストは、主に「講義を中心にした授業科目」のためのチェックリストです。

□本リストの目的は、「授業の質の向上」です。

□本リストは、「授業の画一化」を目指すものではありません、むしろその反対で「個性的な授業」を理念としています。例えば、『授業にアクティブ・ラーニングを取り入れているか』という項目がありますが、アクティブ・ラーニングのやり方については、いろいろな方法がありますから、各先生がそれぞれ独自の方法を工夫して取り入れればよいと考えています。【アクティブ・ラーニングとは、学生が主体的に授業に参加し、学生同士ディスカッションしたり、共同で課題を解決したりしながら学んでいくという授業方法のことです】

□本リストは、授業を設計したり授業を自己評価するときに利用するチェック項目の「例」であり、本来は、教員個人が自分専用のチェックリストを作成されることが理想です。

□すべての項目についてチェックしていくというよりも、まずは自分の授業について考えてみて「必要不可欠である」と思う項目に絞って『イエス』と答えることができるように、授業設計を工夫してみる、そのための参考になるリストです。

□授業が７回分（半分）終わったら、各項目について、０（まったく出来ていない）、１（少しは出来ている）、２（まあまあ出来ている）、３（かなり出来ている）、４（ほぼ完全に出来ている）までの数値で自己採点してみるのもよい方法だと思います。

□自分の授業をビデオに録画して、それを学生目線に立って見ながら各項目をチェックしていくのは、とてもよい方法の一つです。

【科目全体の授業計画】に関するチェックリスト

□「学生が学ぶ」ことを授業計画の中心に置いているか----------□

□授業科目全体で、学ぶ「目標」（ゴール）がはっきりしているか----------□

（目標とは、「学生がこの科目全体として何を学べばよいか」ということ。）

□どんな理由でそれを目標にするのか、あなた自身がはっきりしているか----------□

（＝学生がそれを学ぶ“意義”はどこにあるのかが明確であるか）

□授業科目全体の設計内容は、CP・DP と整合性をもっているか ----------□

□科目全体の「コンセプト」は、明確であるか----------□

□コンセプトは、「目標」と論理整合性があるか----------□

□この授業科目について、受講学生の知識レベル、関心の度合いをある程度、把握しているか----□

□「学習評価」は、目標と論理整合性があるか----------□

□評価法は、客観的か----------□

（「目標を達成できているかどうか」を客観的に調べているか）

□多様な方法で評価しているか----------□

（自己評価・他者評価・客観テスト・レポート・ミニテスト・講義ノート etc.）

□科目全体として、学生の関心・興味を引き付ける工夫があるか----------□

□授業全体を通して、学生の「思考」を引き出す工夫をしているか----------□
□わかりやすいシラバスを用意しているか----------□
□学生が相互にコミュニケーションをとる時間を授業計画の中に含めているか----------□
□学生が教師とコミュニケーションをとる時間を授業計画の中に含めているか----------□
□できる限り視覚に訴える工夫をしているか----------□

【1回目の授業（＝授業のオリエンテーション）】のチェックリスト

□科目全体の目標を伝えているか----------□
□目標を学ぶ「理由（＝意義）」を学生に説明しているか----------□
□この授業の「特長」を伝えているか（＝教師の「個性的特長」を含む）----------□
□１回目の授業で、学生の興味・関心を引き出す「工夫」をしているか----------□
□科目全体にかかわる主な「概念」を簡潔に説明しているか----------□
□「学習評価の方法」（および単位認定基準）をわかりやすく学生に伝えているか----------□
□「受講上の注意点」（私語、遅刻、ケイタイ、コピペなど）を学生に伝えているか----------□
□文献（科目全体、各回の授業のための）を紹介しているか----------□
□この科目を学ぶ魅力（面白み）がどこにあるかを、分かりやすく説明しているか----------□
□授業全体のスケジュールと各回授業のポイントを伝えているか----------□

【２回目以降の授業】のチェックリスト

□「授業目標」（＝何を学べばいいか）は明確で、それを学生に伝えているか----------□
□「授業の流れ（授業の道筋）」をはじめに学生に伝えているか----------□
□「導入」から「授業の終了」まで、授業計画は論理整合性があり、スムーズか----------□
□授業のキーワード（＝専門用語）を、わかりやすく説明しているか----------□
□「理論」や「仮説」に関する知識と「事実」（＝エビデンス）に関する知識を明瞭に
区別して、説明しているか----------□
□一回の授業で学生に提示する知識の量は、適切か----------□
□授業内容について学生に「考える時間」を設けているか　（＝「ミニテスト）などの課題」---□
□授業の最後に、授業目標と関連付けて、授業のポイントを示し、授業を簡潔にまとめているか-□
□この回の「自己学習」のための文献案内をしているか----------□
（自己学習には、「授業の復習」と「ステップアップ」（advanced）の両面を含む。）
□教室外学習のための「課題（＝宿題）」を課しているか----------□
□今日の授業内容についての学生の知識、関心をある程度、把握しているか----------□
□学生が授業に参加する時間（アクティブ・ラーニング）を設けているか----------□
□学生が授業に参加する方法（アクティブ・ラーニング）を工夫しているか----------□
□この時間の授業目標が達成されたかどうかを、なんらかの方法で評価しているか（自己評価、他者評価を含む）----------□

【音声（スピーチ）】についてのチェックリスト

□「話す速度」は、学生が理解しながら聞き取るのにちょうどよい速さか----------□

□「声の大きさ」は、教室のすべての学生が聞き取れる大きさか----------□
□「話しことばは、明瞭か」（＝語尾まできちんと聞き取れるか）----------□
□「学生目線」に立って話しているか（＝専門家にしか通じないような言葉を使ってないか）----□

【映像提示資料】（パワーポイント・スライド）についてのチェックリスト

□スライドの文字は、教室のすべての学生が読み取れる大きさか----------□
（⇒　授業開始前にチェックしているか）
□１枚のスライドの「文字の量」は、適切か----------□
□１枚の画像の情報の量（図と文字）は、適切か----------□
□スライドの枚数は、適切か----------□
□１枚のスライドの提示時間は、適切か----------□

2019年度　北九州市立大学FD活動報告書
2020年3月発行

編集・発行　北九州市立大学FD委員会
〒802-8577
福岡県北九州市小倉南区北方四丁目2番1号